偉大なる大学生活

――森見登美彦「太陽の塔」を勝手に解説

千尾　陀世

みなさん。

大学生活は楽しい時間で溢れかえっている、というのは、我々の寂しい心が生みだした哀しい幻想です。

陽のあたる坂道を自転車で駆け上るような、そんな女神さまも眩しさで目を細めるようなキラッキラの大学生活を送れる人間は全体の一パーセントにも満ちません。その他大勢の悲しき大学生達は、大学脇の側溝の泥を啜って生きているのです。それが現実です。残念でした。

かく言う僕も例外ではありません。

御茶ノ水とかいうお茶なのか水なのかよくわからない都心にそびえ立つ巨大なタワーキャンパスというお洒落心満載なビルに通うキャッキャウフフの年中トマト祭りテンションを維持した学生どもを横目に、僕は猿楽町とかいう猿なのか楽町なのかよくわからない、郊外に見捨てられた山奥の廃病院のような校舎に通い、年中ふんどし一丁で神輿をえっさほいさするような学生生活を送っていました。

今にして思えば、中々にファンキーな学生だったことでしょう。

お金も無ければ、友達もおらず、あるのは阿呆みたいに押し寄せてくる自由な時間だけです。

僕は高校時代に二兆冊の本を読みましたが、大学時代も暇さえあれば本を読んでいました。

世の中にはものすごく沢山の本が溢れかえっています。小説だけでも年間約一万三千冊発行されていて、本の総数となると七万冊にものぼります。

その中にはとうぜん、素晴らしいものもあれば、自分にはちょっと合わなかったな、というものもあします。でもこれは大抵の読書家、というか全人類に共通することだと思うのですが、常日頃から、自分の人生に大きな影響を与え、場合によっては世界の見方を大きく変えてくれるような、そんな素晴らしい小説を求めている。

文句なしの感動。

でも僕が思うに、何の本を読むかっていうのはそんなに重要ではないのです。いつ、どの本と出会うか、が重要なんだと思います。

本には読むべきタイミングというのがある。

間違いなく。

例えば、子供のころ好きだった本を大人になって読んでみたら、その印象の違いにビックリした、という経験は、誰もが一度はしたことがあるのではないでしょうか。

もちろんその場合、変わったのは本ではなく自分の方です。

だからこそ、今出会っておくべき小説を見逃したくない。当時の僕にはそんな強迫観念があったのかもしれません。

高校時代に沢山の本を読んだ僕ですが、高校三年間では残念ながら「出会っておくべき小説」に出会うことはありませんでした。もちろん、当時読んでた小説がつまらなかったと言ってるわけではありません。

どれもこれも面白いものばかりです。

ハツカネズミと人間、走れメロス、夏の葬列、八つ墓村、犬神家の一族、獄門島、悪魔の手毬唄、三つ首塔、病院坂の首括りの家、本陣殺人事件。

ただ残念ながら会うのが早すぎたのか遅すぎたのか、その中に人生の出会いと呼べるものはありませんでした。

そもそもそんな出会いが本当に存在するのか。

そんな疑念を持ったまま僕は大学生になったわけです。

誰しも羨むおっぱぴーな大学生に。

僕はこのまま全てのことに対して「そんなの関係ねぇ」

を貫き通して人生という長い長い下り坂を勢いよく転げ落ちていくのではないか。

そんな恐ろしい想像が頭に浮かんでは消え、えもいわれぬ焦燥感が背中にこびりつき始めた大学二年生の九月。

ついに僕は出会うべき出会いに出会ったのです。

森見登美彦――『太陽の塔』です。

いやあ、長い長い前置きでしたね。

この時点で読者は半分以下になっているでしょう。

でもここまで辿りついたそこのあなた。

おめでとうございます。あなたは偉大なる大学生活の貴重な貴重な五分間を、冗長で鬱屈とした救いようのない駄文を読むという生産性のせの字もない果てしなく無駄な行為に浪費してしまったわけです。

👍

太陽の塔。

一九七〇年、大阪府で開催された日本万国博覧会――通称、大阪万博――のシンボルとして岡本太郎が製作したへんちくりんなモニュメントです。

そんな建築物がタイトルにつけられたこの小説。

後に山本周五郎賞や日本SF大賞を受賞し、平成を代表する作家へと成りあがったと僕が勝手に思っている、森見登美彦さんのデビュー作です。

森見さんはこの小説で日本ファンタジーノベル大賞を受賞しています。

タイトルが太陽の塔でジャンルはファンタジー。

これだけ聞くと、どんな奇想天外なおったまげファンタジーが始まるのだろうと胸がドキドキして文芸部になってしまいそうですが、太陽の塔が宇宙に向かって打ち上ったり、宇宙人と交信するための電波塔になったりすることはありません。

ざっくりと言ってしまえば、四畳半でモゾモゾと暮らしている腐敗しきった京大生が、初めての失恋からどうにか立ち直ろうと奮闘する、ただそれだけの小説です。

なーんだ、よくある青春小説か。

と思った人はもう駄目です。心がねじ曲がっています。

さようなら。頑張ってください。

この小説、そんな一筋縄ではできていない。

なにせ「反復横跳びは素早く物陰に隠れるのに役立つ」とかいう主人公が、かつての恋人「水尾さん」を「研究」と称して、せっせとつけまわす所から始まるのです。

普通の青春小説なわけがない。

いやいや、待て待て。マテ茶。

その「研究」というのは昨今話題になっている「ストーカー犯罪」というやつではないのかい？

貴方がそう思われるのも無理はない。

僕も思いました。

でもその辺はちゃんと主人公から説明があります。

「私にとって彼女は断じて恋の対象などではなく、私の人生の中で固有の地位を占めた一つの謎と言うことができた。その謎に興味を持つことは、知的人間として当然である。したがって、この研究は昨今よく話題になる「ストーカー犯罪」とは根本的に異なるものであったということについて、あらかじめ読者の注意を喚起しておきたい」

だそうです。よかったよかった。

こわっ。

このセリフだけでも、なんとなく主人公の性格というか人となりというかが、見えてくると思います。

休学中の大学五回生。大言壮語、壮語大言、文士的な語り口調で、うだうだうだうだと何やらうだうだ言っておりますなあって感じ。

これだけでも中々に面白い。

いやお前何言ってん？　ってツッコミながら読むことができる。このシステムは今まであるようでなかったような気がします。

さらには鋼の剛毛を生やした大男、高藪、夢を失っちまった男、飾磨、法界悋気の権化、井戸。

そういった腐った大学生の塊みたいな男たちが、自ら京大四天王と名乗り、狭い四畳半で熱い鍋を食ったりなんだりして、男臭と男汁を撒き散らしながらきったねえ部屋で朝を迎えるようなことをするわけです。

もう面白い。

僕の大学生活も中々のものでしたけど、この人たちには勝てないなと思ってしまう。

そんなこんなで、夜になると叡山電車を自由奔放に乗り回す「水尾さん」を追いかけたり、「遠藤」とかいういけ好かない人間とゴキブリキューブ(ゴキブリ数十匹をまるく固めたもの)をプレゼントし合ったりしなかったりしているうちにクリスマスがやってきて四条河原でええじゃないかええじゃないかと騒いでたら良い感じに物語は終わります。

こうして書いてみると中々に壮絶な小説ですね。

なにやってんの。と思わずにはいられない、奇妙で愉快な出来事のオンパレードです。

イケてない大学生がイケてないことを自白し続ける自伝的小説。言ってしまえばそれだけなんですけどね。

でも。

不思議なことに読み切ってみると、この小説に対して透明で純粋で、儚げな何かを感じてしまう。

それはきっと主人公が大言壮語でありながらも、繊細な心の持ち主であることがほんのりと伝わってくるからでしょう。

せつないなあ。

腐りきった大学生が鬱屈とした気分で男汁満載の生活をしていると、年を重ねるごとに焦燥感はどうすることもできなくなり、心の底で渦巻くものはどんどんと増えていく。

もうこうなったら憎きクリスマスの夜に「ええじゃないか」と騒ぐほかない。

ええじゃないかええじゃないかええじゃないかええじゃないかええじゃないかええじゃないかええじゃないかええじゃないかええじゃないかええじゃないかええじゃないかええじゃないか。ええじゃないかえええじゃないか。

ええじゃないか一色に染まった京都の町で、群衆にもみくちゃにされた主人公が叫びます。

ええわけがない。ええわけがあるものか。と。

最初に言いましたけど、大学生活というのは、現在地を永遠にも繰り返すようなもやもやとした毎日です。自分という人間はどこまでいっても所詮自分なんだと思わない日はない。それが現実です。

もやもやもやもや。

でもよく目を凝らしてみてください。

そんなもやもやの中でわずかに、ほんのわずかにキラめいて見えたものがありませんか。

それがきっとこの小説で言う「太陽の塔」なのです。

この小説を読んでいくにつれて、あなたの頭の中には、あなたなりの「太陽の塔」が浮かび上がってくるはずです。そう。日曜日の風が日曜日にしか吹かないように。

まあ自分でも何言ってるか分かりませんけども。

さて。僕は森見登美彦さんのような卓越した文章力を持ち合わせていませんし、朝の市場のような豊富な語彙力も持っていません。なのでこの小説の魅力を語りつくすことは到底無理だということにさっき気がつきました。

そもそも最初にも言った通り、本ていうのは「いつ出会うか」が大事なのです。だから僕の感動をいくら人に伝えたところで、その感動を相手と共有できるわけがない。ブローディガンの「アメリカの鱒釣り」を名作と言う人もいれば、鱒の糞以下だと言う人もいる。その文学のコペルニクス的パラドックスはきっとそういう理屈で成り立っているのです。

ただ少なくとも、当時の僕が読んだ「太陽の塔」はもうこの世のどこにも存在していない。あのときの感動は、あのときの僕にしか得ることができなかった。これは間違いない。

だから、これから読む人にとってこの本が「出会うべき出会いに」なるかはわかりません。

でも。

もし出会うべき出会いになるとすれば、それはきっと「大学生の時に読んだ」、太陽の塔のはずです。

たとえそれが出会うべき出会いにならなかったとしても、こんな冗長な駄文を読んでいるよりはよっぽど有意義な時間を過ごせます。

主人公の憮然とした態度にツッコミを入れ、周囲の人間と繰り広げられる呆れるほどしょうもない事件に大笑いし、最後にはほんのりとした切なさを味わってください。

明日の元気くらいはもらえます。

そして太陽の塔を読んだ暁には、

「え、あなた、まだ『太陽の塔』読んでないの？　大学生なのに？　おやまあ！　お話にならないなあ！」

と友達をいじめてあげてください。

笑いながら教授の禿頭にビールをかけ続けていた僕の大学生活も、今にして思えばそんなに悪くなかったなあと感じられるのは、きっとこの小説のおかげなのです。

太陽の塔。

そんな小説です。

※　この文章には多少の誇張表現が含まれています。